

第 53 回日本脊髄障害医学会印象記



2018年11月22、23日に第53回日本脊髄障害医学会が開催されました。今回私はOPLLの頸髄損傷についてポスター発表をさせていただきました。近年は高齢不全頸損患者の増加に伴い、これまでの脊髄損傷の特徴であった若年、中高年の2つの年齢ピークから徐々に変化してきています。また、糖尿病や高血圧をはじめとした元々の併存疾患が多かったり、様々な合併症が生じたりすることも多くなっています。千葉リハビリテーションセンターの吉永先生の教育講演でも、高齢脊髄損傷者の若年者と比較した特徴や問題点などについてお話されていました。今後さらに高齢頸損者が増えていく中で、当院でも様々な合併症への対処や、介護保険などのサービスを活用した生活の組み立てが非常に重要になっ

ていきます。

近年の脊損リハの慶應義塾大学のiPS細胞を用いた神経幹細胞移植や大阪大学と国立リハビリテーションセンターの嗅粘膜移植など、再生医療の分野での研究が進められています。今後、それらの再生医療が実用化された際には、HALやReWalkなど、歩行支援ロボットを活用した歩行訓練などを行い、効果的な神経教育に繋がるリハを提供していくことが求められます。口演部門でも、歩行支援ロボットや磁気刺激などを活用したリハについての発表がありました。

また、高柳先生から介助犬についてのお話を伺わせていただきました。これまではいわゆる健康な対麻痺の方はあまり適応にならないと考えていましたが、そのような方でも床に落ちたものを取る時や車椅子から転落したときなど、介助犬が必要となる場面があると聞き、非常に勉強になりました。

脊髄損傷は患者さんの傾向も治療も、近年変化してきている領域です。一人一人のニーズや方針の見極めを行いながら、今回の学会で学んだことを今後の実臨床に活かして行きたいと思います。

神奈川リハビリテーション病院 立花佳枝